

「絆」まことに響きの良い言葉です。私も好んで使いますが「絆」という字は偏は糸で、旁は半です。糸は結び付ける意、半は半分で相互の関係でしょう。ですからすぐ切れる様な状態では使いません。切る時には「壊した絆」恩愛の情は『生戻らない前提』ですので断腸の思いに駆られるのは当然のことです。私は絆というものは互いの信頼関係があって初めて結べるものと思っています。深い絆」はあっても「浅い絆」でむすばれて、というように絆が浅いという言葉聞きません。深い絆」で結ばれ修行し、技術の伝承を受け継いでゆく師匠と弟子の関係の様に、技術を身につける職業の方や、習い事の師匠と弟子の関係に見る事ができます。しかしながら、忠誠が崩壊し、エゴや名誉欲娑婆の煩惱に負け、ひとつこじれますと御家騒動に発展してしまい醜い争いを世間の目にされけだすことになります。この他にもアスリートやアーティスト、スタディ等々色々な分野で師弟の絆があると思います。家庭内で深い絆は三三九度で結ばれる夫婦の絆とそれに伴い発生する親子の絆でしょう。神仏の御前に於いて契りをおかず誤りです。間違ってても不一致は発生しないと信じています。しかしながら現在は儀式も多種多様になり「浅い絆」という言葉をつくらなければならぬ程、母子家庭が増えました。残念なことです。又、強制され発生した「絆」もあります。一機一縁です。自分達が被害者に成ってしまった「戦友達」です。強制的に軍人にされ死を共有した仲間であられた恩愛です。昨年の東北地方を襲った大震災もそうです。不慮の事態に遭遇された人々の間に芽生えたのが絆でした。ですから絆は自ら求める時もあるれば自然の生業の中から芽生えることもあります。

仏教界の中をみても師弟の絆があります。唐の惠果大師に教えを乞うた空海大師、比叡山の叡空上人と唐の善導大師を師と仰いだ法然房源空上人、法然上人を師と仰がれた親鸞聖人、道元禪師は榮西禪師や宋の如浄大師を師と仰がれました。

其々祖師たちが学ばれた仏教の道筋は違っても八万四千の悩みを持つ人間の心身の健康、健全を追求され、死後は極楽浄土へと導いてゆく教えは全て仏教の法典の中にあるのです。浄土へ往くという事は言いかえれば佛に成ることであり、仏教では誰でも佛と我との絆を深く保てば「為我現身 入我我入佛加持故 我證菩提」とあり、佛の利益で菩提を得ることができ極楽に往けることになります。お釈迦様以来仏教の法灯を受け継ぐ仏閣精舎善入院の御本尊一光三尊善光寺如来様もそうですが彌陀三尊が二十五菩薩を従えて我々仏教徒の命終に際し、御迎えに来て下さいます。これ以上の「絆」はありません。